

# まきば

2023年 12月 第100号 日本キリスト教会帯広教会

## 【巻頭言】

### 『天にある永遠の住みか』

帯広教会牧師 竹井 剛

コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章1-10節  
『1 わたしたちの地上の住みかである幕屋が減  
びても、神によって建物が備えられていること  
を、わたしたちは知っています。人の手で造ら  
れたものではない天にある永遠の住みかです。  
2 わたしたちは、天から与えられる住みかを上  
に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあっ  
て苦しみもだえています。3 それを脱いでも、  
わたしたちは裸のままではおりません。4 この  
幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいて  
おりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨て  
たいからではありません。死ぬはずのものが命  
に飲み込まれてしまうために、天から与えられ  
る住みかを上に着たいからです。5 わたしたち  
を、このようになるのにふさわしい者としてく  
ださったのは、神です。神は、その保証として  
“霊”を与えてくださったのです。  
6 それで、わたしたちはいつも心強いのですが、  
体を住みかとしているかぎり、主から離れてい  
ることも知っています。7 目に見えるものによ  
らず、信仰によって歩んでいるからです。  
8 わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、  
主のもとに住むことをむしろ望んでいます。  
9 だから、体を住みかとしていても、体を離れ  
ているにしても、ひたすら主に喜ばれる者であ  
りたい。10 なぜなら、わたしたちは皆、キリ  
ストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、  
めいめい体を住みかとしていたときに行ったこ  
とに応じて、報いを受けねばならないからです。』

11月5日(日) 召天者記念礼拝が行われま

した。今年の7月に一人の姉妹が召天者に加え  
られ、姉妹のご遺族も多数出席されたこともあ  
り、32名での祝福された礼拝となりました。  
私たちは召天者記念礼拝において先に召された  
諸先輩方を共に偲び、歩まれてきた信仰の道を  
思い起こしながら礼拝をお献げ致しました。こ  
の日に読まれた聖書はコリントの信徒への手紙  
Ⅱ 5章1-10節でした。再度この紙面を通し  
て御言葉をお伝えしたいと思います。

この聖書の箇所は火葬の時に度々選ばれ読ま  
れるようです。以前、ある教会員の方が天に召  
され火葬場での収骨の時でした。収骨室にご遺  
族の方と故人と関わりの深い御年輩の退職され  
た教職者がいらっしゃいました。収骨が始まろ  
うとする時にその教職の方が静止をかけ、御遺  
骨を前にして、上記の聖書の箇所を朗々と読み  
始めました。厳粛な死に直面し、希望がどこに  
あるのか見えない虚しさに包まれたその場でこ  
の御言葉が読まれることの大きな意味を私は知  
らされました。まったく希望が失せてしまう厳  
しい死の現実の中で、それだからこそ御言葉を  
通して希望の光が迫ってくるのです。私が死ぬ  
べき存在なのだを認識することによってイエス・  
キリストの福音に捉えられるのだらうと思いま  
す。召天者記念礼拝において、まず私たちは兄  
弟姉妹の死を思い、そして私も死ぬべき存在で  
ある事実を見つめるのです。

日常さほど死を意識することなく生活してい  
る方もいらっしゃるかと思いますが、しかし自  
分に死が突然訪れる可能性はいつでもあります。  
今日かもしれませんし、明日かもしれません。

先日私の知り合いの牧師が礼拝前に病に倒れ、その夜に天に召されました。まだ働き盛りで、子育て世代の知人でした。彼には様々なビジョンがあったことでしょう。それに向けて計画を立てて、一步一步誠実に歩まれていたことだろうと思います。知人の突然の死に対して私はショックを隠せませんでした。そしてその知人の死を経験して私にもいつ訪れるか分からない死を強く意識しました。私たちはキリストの福音に生きるために、自分の死から目をそらすのではなくて、自分の死を見つめることが大切です。この聖書の箇所は私たちがどのような存在であるのかということに目を向けさせます。

コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章1節ではこのように記されています。「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。」

この手紙を書いたパウロは、ここで「幕屋」という言葉を用いています。この「幕屋」は新約聖書においてはこの箇所ではしか使われていない特殊な言葉です。ここで用いられている「幕屋」は、人間の「肉体」や「肉体が伴う生活」を表しています。私たちの存在とはどのようなものであるのかということが幕屋に例えられています。幕屋と言っても馴染みのない言葉ではありますが、身近な言葉で言えば幕屋はテントのことです。キャンプで用いるテントをイメージすればわかりやすいでしょう。テントを設営する際には折りたたんでいるシートを広げてすぐに張ることもできれば、片付ける時にはすぐにしまい込むことのできる一時的な簡易なものです。またテントは物が当たったり、古くなってきたら破れてしまうこともあり、嵐が来れば吹き飛ばされてしまう脆いものです。私の子どもたちが幼い頃、毎年夏休みに子どもたちとキャンプに行きました。子どもたちと一緒に暑い中汗を流しながらテントを立てるのも楽しみの一つでした。一生懸命に立てたテントでも

強風が吹くと飛ばされそうになります。そんな時にはテントが飛ばされぬようにペグ

(杭)を何本も土に打って杭に紐を通してテントにしっかりと結び付け固定しました。それでも飛ばされるのではないかと、大雨に見舞われればテントが潰れるのではないかと不安な気持ちで過ごしておりました。このように御言葉が伝えているテント、幕屋は不安定さ、脆さ、弱さを表す象徴です。この地上の幕屋である私たちは、それぞれの人生にあって多くの苦しみや悲しみを抱え、うめきを上げ、苦しみもだえています。それを脱いだらどんなに楽だろうかと、そのように思いながら地上の幕屋を背負って生きています。そしてやがて死が訪れたら私たちは地上の幕屋を必ずたたまなければなりません。永遠に在り続けることはできません。私たちの体とそれに伴う生活はそのように脆く、弱く、死すべきものです。そのことを地上の幕屋は例えています。そして私がそのような者であることをしっかりと見据えていく時にこの御言葉は私たちに死を超えたところのものに更に目を向けさせていくのです。

それが次の御言葉です。「神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。」

神は私たちに「天にある永遠の住みか」を与えてくださいます。この住みかは神が造られる建物であり、幕屋でもテントでもありません。それはたたむことのない、過ぎ去ることのない、そして滅びることのない天にある永遠の住みかです。永遠の住みかとは「永遠の命」を宿す住みかです。永遠の命とは何でしょうか。永遠の命とは、単なる不老不死の命という意味でもなく、私たちが永遠に生き続けるということではありません。永遠の命とは、永遠なる神とどんな時も共にあり、一緒に生きることです。そしてそれは死んだ後のことではなく、今この地上において与えられる希望なのです。それは主イ

イエス・キリストを知って、信じることに  
与えられるものです。主イエス・キリストが私達の罪のために十字架で死んでくださり私の罪が赦されていることを知ること、信じること、そして三日目にイエスキリストが死人の中から復活され私に神の命を与えて下さったことを知ること、信じること、十字架とご復活の主イエス・キリストが「わたしを信じる者は、死んでも生きる」とこのように約束して下さったことを受け入れて信じること、その時にどんな時もイエス様と結びついてイエス様の御愛の中でイエス様と一緒に生きる恵みが始まります。永遠の命を宿す天の住みかを、もう既に持っているものとして「絶望しない人生」を歩む者へとされるのです。

ですから地上の住みかである幕屋にある私たちはパウロと共に「私たちはいつも心強い」（6節）と告白できます。この「心強い」とは「確信を持っている」、「安心して」という意味の言葉です。故に私たちはいつも、どんな時も確信を持って、安心していけるのです。永遠に変わることのない主イエス・キリストに愛され、捉えられ、共にあり、天にある永遠の住みかがあることを知り、信じているからです。この手紙を書いたパウロの生涯は、決して安心できるようなものではありませんでした。様々な苦難や命の危険にあいながらも福音を宣べ伝えていきました。どんなに厳しい状況にあっても苦しい目にあっても自分はずっと安心していけると言っていて、確信に満ちていました。「安心していきなさい」。この言葉は主イエスご自身も繰り返し語られました。福音書に12年間も長血を患った女性の話が記されていますが、彼女は治らない病に苦しむ日々を送っており、主イエスが彼女の町に来たと聞いて

主イエスに近づき、藁にも縋る思いで主イエスの衣の裾に触れました。その時彼女の病は癒されました。そして主イエスは言われました。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい」。主イエスが「安心していきなさい」と言われたこの一言で主イエスが伝えていることは「わたしはあなたと永遠に共にいる。あなたは永遠の住みかにあるものとされている。永遠に変わらない私の愛の内にいなさい。ここにまことの平安に生きる道がある」との救いではないでしょうか。パウロも同じ言葉を聞きました。そして私達もまたこの主イエスのお言葉に励まされて安心して歩むことができるのです。

さて、私たちはやがて先に天に召された信仰の諸先輩方と同じ道、すなわち、幕屋を脱ぎ捨て、死を迎える時が来ます。普通、死というのは、死が私たちの命をのみ込む時かのように思うのですが、しかし4節中ごろには驚くべき言葉が記されています。「死ぬはずのものが命にのみ込まれてしまうため」とあります。信仰者の死というのは死ぬべき私たちが死にのみ込まれ、引き込まれてしまうのではなく、死が命にのみ込まれる時なのだと言うのです。そのために十字架によって死した主イエス・キリストがご復活されることによって、死に打ち勝ってくださり、死の流れがまったく変えられたのです。死が私たちの命をのみ込むのではなく、主イエスの命が死ぬべき私達をのみ込んでくださる。このことは先に召された方々の仰ぎ見た信仰ではないでしょうか。

天にある永遠の住みかをすでに主イエスによって与えられたものとしていつも心強く歩んでいくものとさせていいただきましょう。



## 【教会員の声】

### 『神に導かれた歩み』

帯広教会員 竹井 久美子

まず、今年の4月から帯広教会の群れに加えられましたこと、皆様ありがとうございます。転入して半年が過ぎ、少しずつ教会にも帯広の地にも馴染んできたかなと感じています。と同時に、教会についてまだまだ知らないことだらけですし、そして十勝の本格的な冬を前に、厳しい寒さを覚悟して臨む思いであります。

私は生まれも育ちも東京の杉並区です。クリスチャン家庭ではなかったのですが、キリスト教に触れる機会は殆どなく成長しましたが、大学生の頃、障害児のボランティア活動に熱中して、書店で教育・福祉分野の書物を探し求める中で、福井達雨先生の著書に出逢いました。ご存知の方も多いと思いますが、福井先生は同志社大学神学部出身のクリスチャンで重度の知的ハンディを持つ子どもたちの止揚(しょう)学園を設立し活躍されました。先生の数々の著書には、障害者問題と共に、聖書の御言葉や信仰について記されており、それを通して私はキリスト教に触れ、その価値観のようなものに心が強く惹かれたのでした。

「教会に行きたい!」と切望するようになりましたが、教会に知人もいない自分が教会の門をたたくのは敷居が高く大変勇気の要ることでした。まだネット活用もない時代、何の情報も得られないためなかなか実行に移せないまま年月が流れた後、ようやく思い切って訪ねた教会が、自宅からほど近い場所にある「白鷺教会」(日本基督教団)でした。白鷺教会は当時竹井の父が牧会しており、何もわからない私が初めて礼拝にあずかった際の緊張感を今も鮮明に覚えています。礼拝を中心に、毎週続いた求道者会、同世代の青年会の方々との交流、その他すべて初めての体験であった白鷺教会の影響は大きく、洗礼を受けるには至りませんでした。自分にと

って信仰上の故郷のような母教會的な存在です。

又、遠藤周作氏や曾野綾子氏の作品に没頭し、特に遠藤氏の著作を次々と読みあさり何度となく読み返すようなファンとして信仰を求めました。

しばらくの求道生活の後、夫が神学生として奉仕をしていた拝島平安伝道所に私も移り、その伝道所で受洗致しました。開拓してまもない、小さなアパートの一室で礼拝を守る伝道所での思い出も心に刻まれています。

竹井が神学校での学びを修了し教会へ赴任する時、すでに結婚していた私も初めて東京を離れました。

最初の任地は静岡県にある教会で、そこから夫の転任に伴って、小樽、江別、長崎と異動し、そして帯広へと導かれました。日本基督教団に長く属していた私共が日本キリスト教会へ招かれるとは、予想していない不思議な展開、導きでした。先のことはまさに神のみぞ知る。人間には知る由もない神の領域なのだろうと改めて思います。

それぞれの教会や地域にはそれぞれの特徴がありました。しかし、同じ神様を仰ぎ感謝の礼拝を主日ごとに献げるといった大切な基本はどこも変わりありません。

この帯広教会においても、主に在る喜びを持って皆様とご一緒に教会生活を送ってまいりたいと願います。

どうぞよろしくお願い致します。



## 【教会日誌】

- 7月 23日(日) : 90周年教会創立記念日(1933年7月23日)  
8月 6日(日) : 世界の教会を覚える日  
8月 11日(金・休) : 道東地区修養会 於)佐呂間教会  
8月 21日(月) ~ 22日(火) : 中会伝道協議会 於)札幌北一条教会  
9月 16日(土) ~ 18日(月・休) : 全国青年の集い 会場 北海道 札幌  
10月 18日(水) ~ 20日(金) : 第73回日本キリスト教会大会 於)柏木教会  
10月 29日(日) : 宗教改革記念日礼拝(日本キリスト教会神学校日)  
11月 5日(日) : 召天者記念礼拝 奏楽奉仕者 小泉優香札幌北一条教会員  
12月 3日(日) : 待降節(アドベント) I

## 【行事予定】

- 12月 17日(日) : 交換講壇 説教者 北村一幸旭川教会牧師  
12月 24日(日) : クリスマス記念礼拝  
礼拝後 記念写真 腹話術、トランペット奏楽(演出者未定)  
1月 28日(日) : 2024年定期総会



発行元：日本キリスト教会帯広教会  
発行日：2023年 12月 17日  
発行：「まきば」編集委員  
発行責任者：竹井 剛